

神さまと遊んでいたの

児童施設・別府平和園の新田あらため目園長さんのお年賀に随筆もそえられていた。三人のお子さんの幼い日のやりとりである。

—ある日、長男と次男が小さいとき、遊園地で楽しく遊んだ思い出話を始めました。七歳の妹が「あたしはその時どうしてたの」と割り込んできました。兄貴たちは「その時はお前はまだ生まれていなかったよ」。妹はびっくり。生まれていないなど想像もつかないのです。一瞬、絶句していたが、「ああわかった。そのときあたしは、神様のところで順番待って遊んでいたんだ」。—

一番を待って神様と遊んでいた。幼児のこの言葉は果てしなく深い。限りなく純粹。神（造物主）のみ手に連れられている限りひとは純粹である。しかし、いったん「人間の手にわたるとなんでもダメになってしまう」（ルソー）。

ほとんどの人間が神様を離れどんどん汚れていく。しかし、罪におののき、死に恐怖する時期が必ずやって来る。それが人間の運命。この時、ひとは神や仏を赤子のご

とく求めてやまない。この児このように、生まれる前も、生まれても、また、死しても神のそばに居ると信ずる者は、常に淨福の中にいる。

人類の思想家、宗教家は救いを求めて悪戦苦闘した。精神史上幾人かが解決の道を拓ひらいたが、ひつきようこの児の思いと同じであった。「われ生きるにあらず、キリストわれに生きるなり」(キリスト第一の使徒・パウロ)「仏の家に投げ入れられ、仏の方より行われる」(道元禪師)。

(一九九二年一月三十日)